

総括研究報告

主任研究者 重田定正

心身障害児の福祉向上のため、療育に関する総合的研究の必要性を認め、厚生省は昭和47年度から補助金を交付することになり、太宰博邦を主任研究者とする「心身障害児の療育に関する研究」の研究班が組織され、3年間にわたり研究を進め、着々その成果をあげつつあった。

昭和50年度において、「心身障害児の療育に関する研究」は

- I 小児の心身障害発生の疫学的研究
- II 小児の心身障害早期発見ならびに診断治療基準の設定に関する研究
- III 心身障害児の療育指針の設定に関する研究
- IV 心身障害児の地域福祉に関する研究
- V 身体障害児の教育及び社会的自立に関する研究
- VI 先天性四肢障害に関する臨床的研究

を主要課題として研究が行なわれた。

I 小児の心身障害発生の疫学的研究

◇心身障害児発生のサーベイランス機構に関する研究

サーベイランス機構設定に関し、モニターリングの可能性、有用性をふくむ予備的研究とモニターリングのための共通調査個票試案を作成し、母子保健記録の連結、レコードリンケージの可能性を検討した。

◇東京都、昭和47年における自然死産中の先天異常について

東京都衛生局に保管されている死亡小票から得られたすべての情報により先天異常の発生率を算出し、その種類部位別の発生の特性、地域分布等についても統計学的検討を行なった。

◇日赤医療センターにおける先天異常分娩に関する case control 研究

日赤産院および本社産婦人科に保存されている個人ファイルの記録によって、すべての項目について、その特性の分布状態を事例と対照例につき作成し、 χ^2 -検定を行なった。3カ月未満における薬物摂取は有意に危険を増大することは明らかであるので、検討する必要がある。妊娠3カ月までにおける主要な疫学情報が正確にとらえられるために、十分な研究体制と訓練された調査員が必要である。

◇日赤産院分娩記録に見られた仮性半陰陽の増加とその疫学的考察

日赤産院において昭和32年より仮性半陰陽が連続発生しているのは、ホルモ

ン剤妊娠初期投与によるものと考え、その他の因子についても、より明確な関連性を見出すべく研究中である。

◇母子保健におけるシステムおよびレコードリンケージの問題

東京都豊島池袋保健所管内における昭和50年1月から7月までの乳児、新生児死亡例について調査し、妊娠から産褥を通じての異常、新生児の異常に対処できる一貫した健康管理体制が現実化していないので、医療機関、行政当局、大学等を含む研究機関と社会福祉施設との間で記録の分析を行ない、医学的、行政的問題点を明確にする研究調査がこれからの課題である。

◇地域における心身障害児の実態把握状況

東京都練馬保健所管内昭和43年度出生児を対象とし、6年間の移動を保健所、教育委員会、福祉事務所の記録について調査した。

◇高槻、枚方市における神経筋、循環器障害児の実態に関する研究

高槻、枚方両市をモデル地区として、小学校児童、中学校生徒の検診を行なった結果、先天性心疾患の内容は、両市ともに心室中隔欠損症が最も多かった。後天性弁膜疾患、就中僧帽弁弁膜症の管理指導が重要であり、その原因としてのリュウマチ熱の早期発見と適切な治療がのぞまれる。

◇妊娠分娩が心身障害児発生に及ぼす影響に関する研究

産科調査表および小児科調査票その他必要書類を全国より選出しリストアップされた252の調査協力施設に発送し、昭和50年1月より産科側調査を開始した。産科側は昭和52年1月まで、小児科側は昭和53年10月まで調査の日時を要し、調査成績の集計は昭和54年度に入るものと予定される。

II 小児の心身障害早期発見ならびに診断治療基準の設定に関する研究

全国各地から全国療育相談センターに来所する障害児を対象として、事例の蒐集整理と検討を行ない、この一例一例を各研究協力者がそれぞれの専門的立場から、十分な時間をかけて詳細に観察し、診断、特に原因的診断を検討し、さらに総合的療育方針を立てることが根気よく続けられてきた。

◇Down 症候群についての研究

Down 症患者の睡眠時脳波記録を検討した。痙攣発作に気付かなくても、脳波に棘波などの異常がかなり多く認められた。Down 症候群の脳波異常は脳血管障害によるものと考えられるわけであるが、本報告の対象となった症例では、心臓の異常は1例のVSDのみであり、この例では、脳波異常はみられなかった。

◇神経障害児についての研究

結節性硬化症について、てんかん発作と脳波所見、知能障害ないし発達障害、皮膚症状について研究した。特異的所見である皮脂腺腫は3歳以後でないと高率にみられないので、白斑を中心に早期診断を行なうのが賢明である。

◇心臓障害児の早期発見，診断，治療基準の設定に関する研究

昭和50年の時点で，心疾患に焦点をあて現況をまとめ，各主要疾患別外科治療のアプローチと問題点について解説した。

◇先天白内障の診断，治療基準に関する研究

片眼性白内障と両眼性白内障に分類し，それぞれ発見，診断，治療の適応，後療法等を解説した。全身異常に伴う“syndrome cataracts”が多い点は注目すべきである。白内障であれば手術という安易な考え方はすてるべきであり，可及的に phakic の状態でいける範囲で手術をしないでいくべきである。

◇運動機能障害児

50年度には，脳性麻痺を中心とする中枢性運動障害にその対象を限定した。早期治療と治療効果の判定のための Milani-Compretti, Gidoni の診断チャートと Vojita の検査法の導入により訓練効果があがることを紹介した。

◇言語発達遅滞に於ける訓練の設定基準

言語発達遅滞における発達と障害について概説し，効率的な訓練を行なえるような表を試作した。対象児の年齢の低いことを考え，読書，書字は除外した。この表やその評価については，今後の検討が必要である。

◇歯科疾患児についての研究

歯科領域からみた療育相談，クライアントの歯科的問題に関する意識と口腔内症状，療育相談クライアントにおける歯牙小奇形および形成異常の発現頻度について検討した。

◇歯科治療

心身障害児の保護者のきわめて強い demand にこたえ，全身麻酔下の治療が解決手段のひとつであると考えられる。また歯科受診を可能にするような行動に変容させようと意図する場合に，現実に示されている行動様式を歯科医のほか心理臨床家を加えて観察した。

◇自閉症児の覚醒時脳波

自閉症児の脳波は，徐波成分優位，アルファ波劣位の群と，徐波，アルファ波が正常対照群に比べて差のない群に分かれ，いずれもほぼ共通して正常対照群より速波が優位であるとまとめることができる。

◇情緒障害児

自閉性についての用語の不統一は根本的に自閉，さらに精神発達遅滞をどう考えるかという観点でとらえなければならない。患者および両親に対する指導に混乱を引きおこさないために，療育相談に関係した全員による事例検討が必要かつ重要であることが確認された。

◇重症心身障害児における障害の分析的診断と療育

心身障害児における病名と生活適応からの障害別分析名を検討し，重症児における診断と調査ならびに療育指導に関する問題点を指摘した。

◇心身障害児の教育に関する診断、判別、判定機構に関する研究

心身障害児に対し、それぞれの能力をよりよく発見できる就学の形態、教育の内容等に関し、現時点において、教育機関の受入体制の整備が痛感される。

◇心身障害児の X線検査

障害児に対する X線検査の困難を克服するため、催眠剤の服用、障害児の心理側面を利用したイメージ暗示技法、色彩の工夫等の対策について検討した。

◇心身障害児検査の特徴に関する研究

国立病院医療センター研究部遺伝疫学室の助力により染色体検査を実施し、ダウン症、多発性奇形それぞれ 1 例を確認した。

Ⅲ 心身障害児の療育指針の設定に関する研究

従来の療育指針が主として医療面からのみ両親に告げられており、心理面・教育面・福祉面からの援助が少なかったので、「試案」を作って討論を重ねながら、「理想案」を描いた上で、現実に実行可能な部分を取り出して、次年度において実施することにした。

◇在宅療育指導の方法と体制の確立に関する研究

訪問職種は多様なので、本年度では家庭奉仕員をとりあげ、その実態を調査した結果、ヘルパーの役割と業務内容の明確化、質の向上、身分、待遇の改善が検討された。

Ⅳ 心身障害児の地域福祉に関する研究

◇心身障害児とその家庭に対する地域内ケアに関する研究は、心身障害児への対策として、インテグレーションのメリットが強調されはじめ、その具体的方策として、心身障害児に対する地域療育への志向を明確にしつつある。ここに、地域ケアの内容や方法に不明確な面が多いので、これらを検討してみた。

◇心身障害児の地域ケアと市民参加の方法に関する研究

本年度においては、汐見台団地住民を対象とした生活と、福祉意識に関する実態調査および親の会運動の軌跡と自主訓練会の発生から見たコミュニティケア、または地域福祉の諸問題について述べた。

◇難聴幼児の早期発見にかかわる集団検診およびアフターケアシステムに関する研究

従来は熟練した検査員が扱ってきた幼児用単語スクリーニングオージオメーターの機能を生かしながら、誰でも手軽に操作できる器械を開発した。

単語による幼児の選別聴力検査法のシステムを開発する目的で試作した集団選別用聴覚自動測定装置を使用して 4 歳児を対象に選別聴力検査を行なった。

◇就学前幼児における視機能の異常の早期発見及びアフターケアのシステムに関する研究

アンケートをとり入れたスクリーニング方式で4歳児でも集団検診が可能であるという結論が得られ、さらに精度の高いスクリーニングシステムを確立することを課題とした。

V 身体障害児の教育及び社会的自立に関する研究

—主にサリドマイド児等上肢障害児を中心に—

サリドマイド児などの日常生活動作の訓練、衣服、環境計画、さらに高校進学対策、大学進学問題、職業及び職業適性に関する問題について検討した。

VI 先天性四肢障害に関する臨床的研究

多数の先天四肢障害児を観察、研究した概要を記すとともに、臨床的、レ線的、生化学的検索を加え、計量診断の試みも実施した。

◇サリドマイド胎芽病の鑑別診断に関する研究

調査対象患者について、直接診察のほか現地調査などを行ない、症状による分類を試みた。

◇ポーランド症候群

過去20年間に経験した Poland 症候群45群について報告した。

◇遺伝性ムコ多糖症及びその近縁疾患と四肢障害

遺伝性ムコ多糖症およびムコリピドーシスについて、その手部レ線像を中心に検討した。

◇染色体異常四肢障害

先天性四肢障害の臨床にあたって染色体異常の有無についての検索が自験例によっても不可欠である。

◇計量診断の試み

ホルト・オラム症候群を例にとり、Fisherの尤度法を用いて計量診断を試みた。

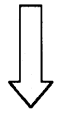
◇先天性心疾患の早期発見に関わる集団検診及びアフターケア

システムに関する研究

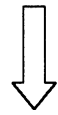
電子工学、音響工学、人間工学、医学統計をできるだけ利用して、小児の心臓集団検診の一般的システムを開発しようとするものである。

◇

心身障害児をめぐる諸問題の打開には、広い分野の専門家の援助協力が必要である。われわれは、心身障害児の療育について研鑽を重ね、ここに本年度における業績を発表することができたが、一層精進して研究を継続し、その責務を果たしたいと念じている。今後とも、限りないご指導ご支援を切望する次第である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



心身障害児の福祉向上のため、療育に関する総合的研究の必要性を認め、厚生省は昭和 47 年度から補助金を交付することになり、太宰博邦を主任研究者とする「心身障害児の療育に関する研究」の研究班が組織され、3 年間にわたり研究を進め、着々その成果をあげつつあった。